

風土



日の縁や茶の花密に主婦の時

(句集『含差』より昭和三十年作)

略年譜に寄るとこの年の五月、結核性疾患で左目の視力を失い、また肺を患い四畳小屋で寝たり起きたりの生活をしています。四畳小屋は桂郎師の執筆や作句のための小屋です。「窓が嵌む野分走りの通ひ妻」の句があるように、妻は小屋に通いながら看病や世話をしています。採りあげた句は病が小康状態の時です。冬日の射す濡れ縁で妻が手仕事をしています。庭先の茶の花も日を浴びて今を盛りと咲いています。「主婦の時」に看病から解放された妻への感謝の気持ちが表れています。

春は血の汚るるごとし水にイッ

(句集『竹取』より昭和三十二年作)

桂郎師の小康状態は続かず、咯血して昭和三十一年には武蔵野市の日赤病院に入院し、肺の手術を受けています。病癒えてこの年に第一句集『含差』が石田波郷の序、中村草田男の跋で刊行されました。さあ、これからだと言いつつ聞かせながらも結核のことが脳裏を走ります。「春は血の汚るるごとし」は体験者のことばです。

父死なすためかげろふの坂急ぐ

(句集『有今』より昭和五十三年作)

この句の前に「術後の父眠らす木の芽起こしかな」、「病む父を背に髭剃るや彼岸寒」などの句があり、死に近い父のもとへ急いでいることが解ります。それにしても「死なすため」という措辞には驚きます。普通は「父よ死ぬな」ということばになるのですが器師は違います。感情に引きずられたことばではなく、「死なすため」という逆説的なことばを置くことにより、父の死の尊厳を器師が強く意識していることが伝わります。このような叙法も器師独特のものであります。この句の後に「父葬り来し手を洗ふ臙かな」があり、感情を表に出さない叙法に徹しています。

桂郎の畦摘草の人を乗す

(句集『有今』より昭和五十四年作)

昭和五十四年作ですので、桂郎師を送ってから数年経っています。「桂郎の畦」とは、桂郎師の「昼畦どの畦のどこ曲がらうか」を踏まえた、七畳小屋近くの畦です。桂郎師が思案した畦で、人々が蓬やはこべらを摘んでいます。桂郎師への思慕が伝わります。

柚子梯

南うみを

柚子梯掛けんと幹をめぐりたる

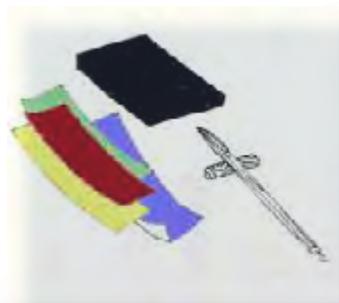
みささぎに日当たる柚子を挽ぎにけり

柚子の籠「水」の屋号の濃く太く

猪噴きし穴に紅葉の吹き溜まる

霧襖やぶつて巨き翼来る

茶の花や径をぬらさず雨の過ぐ
朴落葉流れ堰きつつ押されくる
翔つ鴨の尻が遅れてならぬなり
そのへんの磯の石もて茎を圧す
波音にかすかにふるふ茎の水
霜柱ひびびかせ鯨幕吊るす
老人のよろけ出できし鉢たたき



竹間集

同人作品



綿 虫

田中佐知子

暖房を効かせ引揚記念館
極寒や兵の葉書に余白なく
引揚館出て白息の濃くありぬ
引揚の丘裸木の墓標めく
引揚の丘冬芝のあたたく
息白く引揚の海見はるかす
引揚の丘綿虫を手で囲ふ

都 鳥

柴田 久子

婆の手は魔法使ひや七五三
義理一つ果たして冬の始まり
初霜や庭師が残す高梯子
時雨来てサンシャインビル攫はるる
掌中に除籍 膳 本 咳 きぬ
元氣出る散葉飲みて咳込みぬ
一湾の海平らかに都鳥

二〇一六横浜にて

中村 洋子

色鳥来「水の守護神」壺を持つ
方位盤機盤 サンディエゴに指す小春日の姉妹都市
冬あたたかホテルに郵便開業図
中華街に消防訓練冬に入る
工作船資料館に入る 懐手
木枯一号渡り切つたる霧笛橋
今日からは冬蝶となる白さかな

初成り

橋添やよひ

初成りてふ柿の太りもはせをの忌
大綿小綿おまへも舞ふか翁の忌
宗鑑の棲みし背や冬紅葉
蒸し上がる湯気逃げやすき師走かな
河豚雑炊囲み失ふ目鼻かな
余生にも夢のありけり懐手
どこからを晩年てふや雪ほたる

今朝の冬

浅田 光代

立冬の小さき橋を渡りけり
禅寺の砂紋の深き今朝の冬
一人膳ゆたか柚子の香載るだけで
冬紅葉照るや小暗き影を持ち
大根了徳寺大根焚 三句焚く真白き割烹着がわんさ
大根焚経を唱和の婆の唇
大根焚の湯気縫つてゆく取材班

坂の口

柿沼 盟子

傘させぬほどの路地ゆき石露の花
綿虫や道から見えぬ坂の口
この先に磴ありと札しぐれ来る
重ね着や予防注射の細き針
竹箒凭るる塀も冬景色
極彩中華街の廟は眠らず北風強し
大綿やポート乗り場の板乾き

秋行くや

高村 令子

朝刊来墨絵ぼかしの霧の中
道一つ違へて霧の山路かな
秋行くや樹影瘦せゆく並木径
一步づつ虜となつてゆく花野
日当たれば野の香かすかな茅の輪かな
日向ぼこマリアの如く嬰抱いて
大根を洗ふ水掴み直しては

風土独語／南 うみを



泥匂ふ十一月のだるま船

下山田美江

「だるま船」は底の平たい大型の艘です。停泊の「だるま船」から泥が匂ってくるのに気付きました。土砂運搬の「だるま船」でしょう。何故匂うのか。それは「十一月」が小春日和を含んでいるからです。作者は小春日に包まれた「だるま船」からの匂いをキャッチしました。「十一月」が効いています。

凧や北京ダツクの薪積まる

奥田 茶々

北京ダツクは中華の高級料理です。ダツクにタレを掛けながら何度も焼いて皮をカリカリにします。中華街にその薪がどっと積まれ、並び吊られたダツクが焼かれるのを待っているのです。「凧」と「薪積まれ」が響きあっています。

冬薔薇の中ゆく大仏次郎館

落合 絹代

横浜の「港の見える丘公園」の一角に、洋風のしやれた「大仏次郎記念館」が建っています。そして公園は今「冬薔薇」の真っ盛りです。「薔薇」は横浜市の花で、公園は一年を通じ薔薇を絶やしません。作者は「冬薔薇の園」をゆっくり歩き館に近づきます。

ガントリークレーン並ぶ寒暮かな

平瀬 千会

「ガントリークレーン」は巨大な荷を降ろす巨大なクレーンです。それが塔のように岸壁に並んでいます。夕暮れに影絵のように立ち並ぶ鉄骨の姿は寒々しい限りです。「寒暮」が効いています。

氷川丸の一等船客花毛布

井口ふみ緒

かつての豪華客船「氷川丸」は横浜港に係留され、一般に公開されています。作者は一等船客を覗き「花毛布」に目を止めました。三等船客の毛布に比べ、上等の毛布が花の形にベッドに置かれています。その格差を想いつつこの船の来し方を顧みるのです。

青年は野菜ソムリエ小鳥来る

中嶋 陽子

「ソムリエ」は本来ワインのあらゆることに精通する専門家です。この「野菜ソムリエ」は野菜に精通する青年です。無農薬や有機栽培の野菜を手に、買い物客に説明しているところです。この青年を応援する如く「小鳥来る」がまわりを明るくしています。

つはぶぎの花に葉に噺のまつしぐら

内藤 静

「噺」は「とん」と読みますが、作者はあえて「ひ」とルビを打ち朝日を強調しました。朝日が出るや、「つはぶぎの花」の黄色に、また艶のある葉に届いたことに驚いたからです。「まつしぐら」に、冬の花の少ない時期の日差しのに在り様が掴まえられています。

〈以下略〉

風土集



南うみを選

凧や北京ダツクの薪積まる 東京 奥田 茶々

浜つ子の襟立ててゆく海桐の実
うさぎ跳びの波と遊べる鴨の群
船軋しむ音ひとつづつ冬めける
工作船の弾痕あまた冬ざるる
ガントリークレーン並ぶ寒暮かな 町田 平瀬 千云

公園に津波避難図ゆりかもめ
秋惜しむ船行き交へる横浜港
大根も土産に北の旅終はる
小春日のバス停に列伸びてをり
青年は野菜ソムリエ小鳥来る 東京 中嶋 陽子

東海道品川宿や小夜時雨
時雨るるや品川浦の舟だまり
密談の旅籠の跡や石路の花
浅炒りの珈琲の香や室の花

操舵室に祀る神棚神の留守 大和 落谷 絹代

打つてみるモートルス信号小春風
木枯や警戒船の水脈白し
椰子の実で磨く甲板冬青空
案内は船長小春の日本丸
絵タイルの異人館跡石路の花 いわき 佐藤 すこ

生垣のピラカンサの実異人館
伝道の椅子に座しをり冬薔薇
円舞曲の唱歌「港」や小春空
第一陣 二陣 三陣 大白鳥
石路の花入口に咲く蕪村庵 京都 杉本 葉土子

歳の瀬や真鯉の背に金微か
湯立坂散り敷く枯葉掻き集め
紅葉の枝に松葉の簪かな
黄金の噴水の如銀杏立つ